1992 覚え書き

1992 年『眼の座標Ⅲ』展（代々木ｱｰﾄｷﾞｬﾗﾘｰ）ﾃｷｽﾄ

絵画という物体が、この世の何処かに存在するわけではない。それは物体としては、画布であり、紙であり、絵具であり、木炭であり、etc.といったものが集まって出来たものである。そして、それらの集合体がすなわち絵画である、というわけではなく、われわれが、それらの集合体がすなわち絵画である、というわけではなく、われわれがそれらの集合体を絵画として見なすとき、それは絵画として、はじめてこの世に存在する。

その存在の在り様は、物体として、アオプリオリにこの世に存在するものではなく、われわれの認識が作り出す意味作用として存在する。（このとき私は、われわれが言葉を紡ぎだすときの、意味作用一般について言っているのではなく、ある物体を絵画として見なすということの、ある特殊な文化性、歴史性について言っている。）

われわれが、ある物体を絵画として見なすということ。それは実は、絶えざる意味の産出である。しかし、それが余りに自明であるとき、われわれは絵画という物体が確固とした存在として、この世にあるかのように思ってしまう。自明であるということは、意識をしないということであり、それは見えるはずのものが見えていない、ということである。

では、絵画という存在が自明なものとなったのは、一体いつごろのことなのか。われわれの国には古くから絵画と呼ばれるものがあったが、それを今のわれわれの概念で絵画と呼ぶようになったのは、それほど昔のことではない。しかし例えば、「日本古来の絵画について」われわれが語るとすると、既にそこには絵画という意味作用が思考の文脈として潜在している。（われわれは、現在のわれわれの属している特殊な文化性、歴史性を拭い去っては何事も認識できない。）

私はわれわれの国の地方性について、またはわれわれの国の歴史の断続性について、ことさらに語ろうとは思わない。ただ私は、私の中の絵画という意味作用を私自身がどのように裏切っていけるのか、ということに興味があり、もしもわれわれが、われわれの国の地方性を意識せざるを得ないとしたら、それはわれわれが主体的に絵画という意味作用への裏切り行為を組織できないときであろう、と思う。

しかし、主体的でない裏切り行為とは、この際何の意味を持つのか？絵画という意味作用を疑い、そして裏切ることは、見えるはずのものを見たい、と欲求することのはずだ。主体的でない欲求、というものがあるとしたら、それは一体ナニモノなのか。

より単純に欲求するために、より深く疑うこと。描くという営為は、それらの「反復」行為であり、「創造」することとも違っている、と思う。